

ドヤ街を寿ぐ  
 ～横浜市寿地区のドヤ街の保全継承戦略としての芸術創造界限形成計画～

1741130 沼尾 航平

寿町 都市デザイン ドヤ街  
 創造都市 簡易宿泊所 福祉

1. 研究の目的と背景

日本国内にはドヤ街と呼ばれる街が各地に存在する。これらは簡易宿泊所密集地域のことを指し、横浜市寿地区はその中でも日本3大ドヤ街として数えられるほどの規模の大きい簡易宿泊所密集地域である。

寿地区では住民像の変化によって簡易宿泊所がその役割を変えながらドヤ街という街の形を現在まで残してきたが、高齢化率の更なる上昇とその先にある地区内の人口減少、簡易宿泊所の空室の増加などから今後大規模な建て替えによるドヤ街の解消、消滅が予想される。

寿地区に残るドヤ街という街の形態とその暮らしを保全継承しながら、新たなドヤの在り方を提案することが本計画の目的である。

2. 寿地区の地域特性

2-1. 寿地区の歴史的背景

寿地区は吉田新田という埋立地の上にある街であり、1874年に埋め立てが成された。戦後の接収解除後、職業安定所が移転してきたことが起点となり、寄せ場としての機能を持った。1950年代から日雇い労働者からの需要により、簡易宿泊所が増加、1960年代には児童教育施設夜間銀行など生活環境の整備・向上が成された。1980年代後半には日雇い労働の求人数がピークを迎えるが、その後港湾業の近代化により日雇い労働の求人は激減する。それにより、仕事を失った生活困窮者が増加し、それと同時に住民の高齢化も進行した。そのような街の状況に合わせ、地区内には生活困窮者の支援施設や介護施設が設置された<sup>1</sup>。現在では高齢化がより進んでいる中で、簡易宿泊所をゲストハウスとして活用し、新しい人の流れが少しずつ生まれ始めている。

このように寿地区は住民像の変化に合わせ、役割を増やしながら、または変容させながらドヤ街という街の形を継承してきたといえる。

2-2. 簡易宿泊所利用者の生活スタイル

簡易宿泊所の間取りは3畳一間が多く、寝るための空間になっており、キッチンやシャワーは基本的に部屋に備わっておらず、ランドリーや飲食店などのその他の生活の設備は街の1階部分にあふれ出している<sup>2</sup>。

簡易宿泊所の利用者はコインランドリーや食堂、居酒屋に集まり時間を過ごし、介護施設や診療所、自立支援施設に通うことになる。

これにより、住民同士は必然的に同じ空間に集まり、コミュニティが生まれている。近年では福祉施設同士のネットワークと福祉施設と住民の繋がりが孤独死を防ぐ役割も担っている<sup>3</sup>。

2-3. 横浜市の創造界限形成

寿地区を含む横浜市は創造都市政策を推進しており、歴史的建造物の保全や創造産業・文化芸術産業の発展の場を整備してきた。みなとみらい地区や初寅・日ノ出町地区では創造界限の拠点や、アーティストインレジデンス事業を展開している。また寿町においては、2009年にコミュニティアートプロジェクトが展開されたが、その活動のみに留まり、継続的な活動には至っていない。

2-4. 寿地区の街路活用

寿地区の飲食店の多くは街路に面した開口部から什器や家具を広げ、店舗空間の拡大を自ら行っている。またそれらの什器や家具に統一性がなく、有り合わせの物で空間が構成されているのも大きな特徴である。飲食店以外にも介護ステーション、コインランドリーなどでもこのような光景が見られる。他の場所にはない住民側の必要性和行動力から生まれた街路活用は寿地区の大きな特徴だと考えられる。

2-5. 寿地区の課題

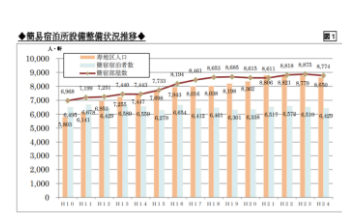
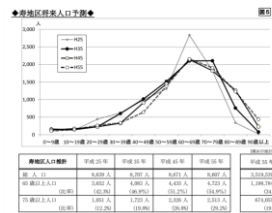


図1 寿地区将来人口予測 図2 簡易宿泊所整備状況推移

① 高齢化率の上昇

平成25年には65歳以上が住民全体の42.3%を占めており、高齢化はその後進行していくと予測されている<sup>4</sup>。

若い年代の住民の増加はなく、近年では部屋での死亡を防ぐため訪問介護型の介護ステーションが増加している。

(図 1)

### ② 簡易宿泊所の空室率の上昇

簡易宿泊所の部屋数は 8700 前後で緩やかな増加傾向があるのに対して、利用者数は 6500 人前後で上下しながらも緩やかに減少している。現在 2000 近くの空き部屋がある上に、今後空室率はさらに上昇すると考えられる。

この課題を解決しようと簡易宿泊所のホテル化をする流れが生まれており、観光客やバックパッカーの宿泊がみられる。(図 2)

### ③ 簡易宿泊所利用者の対象化

簡易宿泊所の利用者のうちの多くは生活困窮者であり、生活保護受給者率、障がい者人口が増加していることから、地区外の人々から保護や支援が必要な保護対象者としてみられていると考えられる。これにより、周辺地域と寿地区内との間に障壁が生まれ、新たな流入者の増加の妨げになっていると考えられる。

## 3. 計画内容

### 3-1. 計画コンセプト

寿地区の住民の長期滞在化により街の新陳代謝が悪いという課題と寿地区にはドヤ街だからこそ生まれる特徴的な暮らしが根付いているということから、本計画では寿地区での創造限界形成をコンセプトとし、アーティストを引き入れることによって、住民側の創造性が刺激され、芸術の発信拠点となること、新しい形での生活困窮者にとってのセーフティネットとなることを図ることとする。

### 3-2. 計画詳細

#### ① 創造限界の形成

寿地区にアーティストを誘致し、寿地区に創造限界の拠点となるような施設をいくつか設ける。これらの施設を寿地区の中心にある街路に集約し、その街路を交流の軸と位置づけ、アーティストと住民が交流する場所として整備する。交流の軸にはギャラリー、工房、書店、ラウンジ、ランドリーなどを設置し、寿らしい街路の活用法を取り入れることによって、創造性が刺激されるような空間を形成する。また横浜市を舞台として行われる国際的な芸術祭である横浜トリエンナーレへの参加により、アーティストにとっても実りのあるプログラムにすることが可能になる。

#### ② 滞在者の増加・多様化

創造限界の整備と同時にアーティスト・イン・レジデンスプログラム、ゲストハウス化の 2 つの簡易宿泊所の活

用を開始する。1 か月以上の滞在期間でアーティストは制作活動を行い、寿町での暮らしを経た作品を展示する。それらを見にやってきた観光客が寿の暮らしを体感できるような宿泊施設としてゲストハウスを整備する。これにより寿で行われていなかった人の循環が再開し、街の新陳代謝をあげることが可能になる。

#### ③ 自立支援の強化

ゲストハウスが増加し、観光客を含む寿町への滞在者が増加した後、ゲストハウスを生活困窮者の職業訓練の場としても活用する。滞在者と寿町の住民とをつなげるという役割もあり、コミュニケーションの機会にもなる。生活困窮者が簡易宿泊所で暮らしながら、ゲストハウスで働き、最終的には自ら寿地区の外に住居を持ち、職業を得るということを最終的な目的とする。



図 3 計画配置図



図 4 交流の軸の様子

#### 参考文献

- 1) ことぶき共同診療所寿町関係資料室, 寿町ドヤ街第 2 号寿町における歴史的記録, ことぶき共同診療所寿町関係資料室, 2008
- 2) 相澤啓太, 竹内泰, 工藤繁樹, 千葉大生, “横浜寿町地区の居住実態 日本の都市空間における住機能を備えた諸施設に関する研究 その 2” 日本建築学会大会学術講演梗概集, p421-p422, 2014
- 3) 山本薫子, “現代日本の都市下層地域における福祉ニーズ増大と地域課題の再編 - 横浜・寿地区の事例から -”, 日本都市社会学会年報, 31, 2013
- 4) 横浜市, 寿町総合労働福祉会館再整備基本計画, 横浜市, 2014